

ペリー100年の夢

トラベルライティングとしての『アメリカ艦隊遠征記』

山里勝己

本稿の目的は、マシュー・カルブレイス・ペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794-1858) を指揮官とする、『アメリカ艦隊遠征記』の中の琉球をめぐるナラティブを、トラベルライティングの視点から分析することにある。(注1)

「トラベルライティング」とは、旅行中に書き記したものを意味する。あるいは、それは新しい世界や遠く離れた土地に住む異なる人種や民族に関する報告を指す言葉でもある。そして、それはたいていノンフィクションとして分類され、文学としてはサブジャンルに属するものであると考えられてきた。しかしながら、“Travel writing”はハイブリッドなジャンルである。Carl Thompsonはこのジャンルにおける「報告者」(＝ノンフィクション)と「語り手」(＝フィクション)を明確に区別して定義することの難しさに言及している。(27)

Mary Louise Prattは、トラベルライティングにはより複雑な様相があることを指摘し、このジャンルの研究に“contact zone”の概念を導入しつつ、主体は他者との関係性の中で生成されると指摘した(8)。『遠征記』の中では、琉球人たちは「来航者」(travelers=invaders)の眼差しに晒される「来航される者=被来航者」(travelees)であり、非対称の力学の中でその姿が表象された人物たちである。つまり、大航海時代から始まる移動の歴史の中で、旅行者する者たちの書いたトラベルライティングは、彼らの視点から「来航される側」の姿を伝えることでユーロセントリックな世界像を構築することに大きく寄与してきた。本稿では「来航者」と「来航される者」のコンタクトのありようを中心に分析したが、同時に“travelees”のパースペクティブも前景化しながら分析した。

The Cambridge Companion to American Travel Writing (2009)の編者は、トラベルライティングは、個人のアイデンティティ形成と国家的アイデンティティ構築に深く関連するジャンルであると指摘している(1)。琉球とのコンタクトは、アメリカ側にアイデンティティの再構築あるいは再確認、あるいは思いもかけない揺らぎをもたらす経験となった。この様相について、『遠征記』だけでなく、ペリーの随行者たちの言説にも言及しながら分析した。

北米大陸の「フロンティア消滅」に続いてアメリカの海洋進出が始まり、太平洋をめぐるトラベルライティングが書かれるようになった。(McBride 165) ジョン・ガスト(John Gast, 1842-1893)の「アメリカン・プロGRESS」(*American Progress*, 1872)は、「マニフェスト・デスティニー」の絵画的表象である。このよく知られた絵画をあらためて分析すると、文明=光の世界、未開・非文明=闇の世界という、キリスト教的な二分法が基本的な構図となっていることが理解される。ユーロアメリカ文化に内在する神話から放射される想像力のエネルギーが、アメリカを突き動かし、北米大陸を横断し、未知の海洋世界に拡散し始めた。太平洋を西に進むと、その果てるところに「新たなフロンティア」のような琉球の島々が横たわっていた。これが21世紀に至る大まかな流れである。

1856年に刊行された『遠征記』は正式には3巻本であるが、これまで『ペリー提督日本遠征記』のタイトルで日本語に翻訳され読まれてきたのは第1巻である。トラベルライティングの多くは「一人称で書かれた作者の実体験を記録した旅行記」であるが、『遠征記』は複雑なプロセスを経て書かれている。つまり、『遠征記』はペリーの日誌や書簡を中心として Francis L. Hawks により編纂されたが、艦隊の将校や乗組員たちの記録も使用されている。それゆえ、『遠征記』は multi-voiced narrative と呼ぶべきものになっている。その中に、ベイヤード・テイラー(Bayard Taylor, 1825-1878)がいて、『遠征記』の第8章のほぼ全てがテイラーによる大琉球島(現在の沖縄島)に関する報告となっている。

1853年のアメリカ艦隊来航の際に琉球王国の通事として活躍したのが牧志朝忠である。艦隊の首席通訳・翻訳官はサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ(Samuel Wells Williams, 1812-1884)であった。ペリーは琉球できわめて高圧的かつ威圧的な態度を押し通した。このようなペリーを見つめるウィリアムズはペリーから距離を置いていた。アメリカ側の傲岸な振る舞いや要求に対して、牧志はくり返し嘆願し抗議をするしかないが、両者の交渉を観察していたウィリアムズは次のように書く--“It was a struggle between weakness and right and power and wrong, for a more highhanded piece of aggression has not been committed by anyone. I was ashamed at having been a party to such a procedure, and pitied these poor, defenseless islanders who could only say no.”(Williams 13) ここでなによりも重要なことは、ウィリアムズの「文明人」としての「自己幻想」もしくは「アメリカン・アイデンティティ」が、琉球人に対するアメリカ側の態度を観察しているうちに自らの内部で揺らぎ始め、新たなアメリカ人像が生成される契機になっていることである。「弱さと正義、力と不正義との闘い」は、現代にも通底する鋭い言葉である。ウィリアムズは自らを“the unwilling agent... of violence and wrong”であると5月30日の日録に書いている。この出来事は、1853年の琉球に出現した「コンタクトゾーン」における非対称の力の葛藤を記

録したものである。

琉球/沖縄はすでに 19 世紀中葉からアメリカの前進基地になっていた。牧志はアメリカ合衆国史を読み、アメリカについてある程度の知識を有していた。弱小の琉球王国の知識人牧志朝忠にとって、アメリカ艦隊との非対称のコンタクトは、新たな主体の構築を模索する契機にもなったことだろう。一方、ウィリアムズにとどまらず、そのジャーナルで琉球（人）を“a mouse in the talons of the eagle” (174) に喩えてペリーを批判したウィレット・J・スポールディング(Willet J. Spalding)のように、他者化された存在と遭遇する中で自らの主体について省察する言説がアメリカ側にも生成されている。1853 年のコンタクトは、「文明を有するトラベラー」が他者化された「ネイティヴ＝トラベラー」の鏡に映った自らの姿を見つめる中で、アイデンティティが揺れ動く瞬間を記録したのもでもあった。

ペリーの主要な目的は日本開国であったが、琉球占領も遠征の初期から企図されていた。ペリーは、1852 年 11 月 2 日、米国海軍長官に書簡を送り琉球占領を提言し、“... the argument may be further strengthened by the certain consequences of the amelioration of the condition of the natives, although the vices attendant upon civilization may be entailed upon them.” (*Expedition* 85) と書いた。ペリーは、自らは文明人であり、「ネイティヴたち＝来航される他者」はたとえ文明の害悪に晒されるようになろうとも、文明の救済を待望する者たちであると信じてやまない。そしてこのような世界観が、先述した「アメリカン・プロGRESS」の光と闇のメタファーの延長線上にあることは明らかであろう。

ジョージ・H・カーは、1853 年のペリー来航から 1854 年の「合衆国と琉球王国との協約」締結までを「アメリカによる沖縄の第一次占領」と呼び、(それからほぼ 100 年経った) 1945 年に第二次占領が始まったと指摘している (3)。1852 年の「琉球占領計画」が、日米の凄惨な地上戦を経て実現するのは 1945 年のことであったが、このような「ペリー-100 年の夢」が、21 世紀沖縄の現実を生成してきた歴史的ダイナミズムの淵源にあることは言を俟たない。

Notes

注 1 アメリカ艦隊の報告は通例『ペリー提督日本遠征記』として翻訳刊行されているが、原書のタイトルは *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan* となっていて、“China Seas” が訳出されていない。本稿では『アメリカ艦隊遠征記』または『遠征記』とし、テキスト引用の際には *Expedition* と略記する。

Works Cited

- Bendixen, Alfred and Judith Hamera, editors. *The Cambridge Companion to American Travel Writing*. Cambridge UP, 2009.
- Kerr, George H. with an afterword by Mitsugu Sakihara. *The History of an Island People*. 1958. Revised ed. Tuttle, 2000. 邦訳は山口栄鉄『沖縄 島人の歴史』、勉誠出版、2014。
- McBride, Christopher. “Americans in the larger world: beyond the Pacific coast.” Bendixen and Hamera, pp. 165-79.
- Perry, Commodore M.C. *Narrative of the Expedition to the China Seas and Japan, 1852-1854*. 1856. Dover Publications, 2000. 本稿では Dover 版を用い、タイトルページのとおり記述した。日本語訳は、『ペリー提督日本遠征記』(上・下) 角川書店、2014 年を参照した。
- Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. 2nd ed. Routledge, 2008.
- Spalding, Willet J. *The Japan Expedition. Japan and Around the World, An Account of Three Visits to the Japanese Empire, with Sketches of Madeira, St. Helena, Cape of Good Hope, Mauritius, Ceylon, Singapore, China, and Loo-Choo. By J.W. Spalding of the U.S. Steam-Frigate Mississippi, Flagship of the Expedition*. 1855. London: S. Low, 1856. *Ryukyu Studies since 1854: Western Encounter Part 2*. Edited by Patrick Beillevaire. Cuzon Press, 2002. ページ番号は原書のものである。
- Thompson, Carl. *Travel Writing*. Routledge, 2011.
- Williams, Samuel Wells. *A Journal of the Perry Expedition to Japan (1853-1854)*. Beillevaire 編 *Ryukyu Studies* 収録。ページ番号は原書のものである。ウィリアムズ日誌の初出は *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XXXVII, 1910. 邦訳は、洞富雄『ペリー日本遠征随記』雄松堂出版、1970 年。